

## 「大阪芸術大学音楽学資料のデータベース化に関する研究」

研究年度・期間：平成5年度～平成7年度

### 平成5年度

研究代表者：谷村 晃  
(音楽教育学科 教授)

研究ディレクター：谷村 晃  
(音楽教育学科 教授)

共同研究者：月溪 恒子  
(音楽学科 教授)  
馬淵卯三郎  
(音楽学科 教授)  
森 淳  
(教養課程 教授)  
樋口 光治  
(音楽教育学科 助教授)  
芹澤 秀近  
(芸術計画学科 講師)  
木原 俊哉  
(音楽教育学科 講師)  
志村 哲  
(音楽学科 講師)  
中川 暎量  
(舞台芸術学科 講師)  
前川 陽郁  
(音楽教育学科 講師)  
加藤 由紀  
(音楽学科 非常勤講師)  
木村 和実  
(大学院 助手)  
高畠 克己  
(大学院 助手)

研究補助者：石川 貴史  
(大学院 副手)  
池本 幸司  
(大学院 副手)  
西谷 陽二  
(大学院 副手)  
西谷美加子  
(大学院 副手)  
東野 眞紀  
(大学院 副手)

### 平成6年度

研究代表者：谷村 晃  
(音楽教育学科 教授)

研究ディレクター：谷村 晃  
(音楽教育学科 教授)

共同研究者：月溪 恒子  
(音楽学科 教授)  
馬淵卯三郎  
(音楽学科 教授)  
森 淳  
(教養課程 教授)  
樋口 光治  
(音楽教育学科 助教授)  
木原 俊哉  
(音楽教育学科 講師)  
志村 哲  
(音楽学科 講師)  
芹澤 秀近  
(芸術計画学科 講師)  
中川 暎量  
(舞台芸術学科 講師)  
前川 陽郁  
(音楽教育学科 講師)  
木村 和実  
(大学院 助手)  
高畠 克己  
(大学院 助手)  
研究助言者：加藤 由紀  
(音楽学科 非常勤講師)

研究補助者：池本 幸司  
(大学院 副手)  
田口 雅英  
(大学院 副手)  
西谷 陽二  
(大学院 副手)  
西村美加子  
(大学院 副手)  
東野 眞紀  
(大学院 副手)

### 平成7年度

研究代表者：谷村 晃  
(音楽教育学科 教授)

研究ディレクター：谷村 晃  
(音楽教育学科 教授)

共同研究者：月溪 恒子  
(音楽学科 教授)  
馬淵卯三郎  
(音楽学科 教授)  
森 淳  
(教養課程 教授)  
樋口 光治  
(音楽教育学科 助教授)  
木原 俊哉  
(音楽教育学科 講師)  
志村 哲  
(音楽学科 講師)  
芹澤 秀近  
(芸術計画学科 講師)  
中川 暎量  
(舞台芸術学科 講師)  
前川 陽郁  
(音楽教育学科 講師)  
木村 和実  
(大学院 助手)  
高畠 克己  
(大学院 助手)  
研究助言者：加藤 由紀  
(音楽学科 非常勤講師)

研究補助者：池本 幸司  
(大学院 副手)  
西谷 陽二  
(大学院 副手)  
西村美加子  
(大学院 副手)  
東野 眞紀  
(大学院 副手)  
廣瀬 信夫  
(大学院 副手)

廣瀬 信夫  
(大学院 副手)  
宮脇 篤志  
(大学院 副手)  
山口 真理  
(大学院 副手)

廣瀬 信夫  
(大学院 副手)  
山口 真理  
(大学院 副手)

山口 真理  
(大学院 副手)

## 研究経過の概要

### 初年度（平成5年度）

- ・本大学所蔵の音楽学資料の全容の把握
- ・そのデータベース化のための基礎作業
- ・書誌データ作成のためのフォーマットの確定
- ・音楽学資料のデータベース化作業の手順の決定及び一部試行
- ・音楽学資料保存の方法としての音源のCD化に関する研究と試行
- ・音楽学資料の補充、拡充に関する研究

### 第2年度（平成6年度）

- ・音楽学資料の分野別のデータベース化作業の実施
- ・そのデータベースを利用した目録（英文）作成の可能性の検討
- ・目録を利用した具体的個別的研究論文作成に向けての検討
- ・本大学所蔵の蓄音機の映像データベース及びその再生音のデータベース化作業

### 第3年度（平成7年度）

- ・音楽学資料のデータベース化作業の継続
- ・そのデータベースの利用可能な目録作成のための作業
- ・音楽学資料の重要な一分野である本大学の蓄音機コレクションの映像、書誌事項、再生音のCD-ROMによるデータベース化
- ・3年間の研究成果公表のための準備

## 研究成果について

予想をはるかに越える量の資料を扱うことになったので、資料整理のために必要な人員と時間を十分に確保することができなかつたので、当初予定した作業の50%にも満たない状態で終わらざるを得なかつた。さらにこの作業を遂行し、本大学所蔵の音楽学資料の完全なデータベース化に到達するためには、なお数年を要するものと思われる。

しかしながら、この3年間の研究の結果、この作業全体についての見通しも立ち、一部資料についてはCD-ROM作成の試みも行われた。また、データベースの基本的形態も確定することができたので、この種の共同研究としては順調に進んだものと考えられる。ただ、これでこの共同研究を打ち切つたのでは、折角の研究結果が無に帰する恐れがある。引き続き、同種

の研究により、この成果を順次拡大して行く必要がある。この研究成果の一部は、平成8年度に開催される本学の教員研究会において公表される予定である。

### **研究の反省**

3年間の継続研究で4万点を越すSPレコードのデータベース化が到底不可能であることが明かとなった点、作業担当人員の確保、作業の性質、書誌データの確認等についての見通しが甘かったことを反省している。200点以上ある蓄音機に関しては、その映像、再生音、書誌事項等をデータベース化したCD-ROMを試作したが、蓄音機の修理、補修等を十分行い得なかったため、やや不完全なものとなっている。この点を反省して、この蓄音機のデータベースをより精度の高いものにする可能性を探らなければならない。また、作業の過程で現在のコレクションをより価値のあるものとするための資料の補充、修理、追加についての配慮がないことが残念である。将来、本大学に大学博物館を設置しようということにでもなれば、この配慮が特に重要なものとなるであろう。